◆八木健　選

～峰崎成規『遊戯の遠景』（角川書店）を読む ②～

第二章「ラビリンス」（二〇一九）

ラビリンスとはどういう意味なのか。辞書で調べたところ「迷宮」とか「迷う道」と解説されていた。ラビリンスを使った句は次の句である。

ラビリンス都市に暗渠の冬の川

暗渠（あんきょ）だから見えぬ。それが冬の川というのだから全く想像の世界である。暗渠の冬の川に心遊ばせる作者のイメージに、空想の世界を想像させられる。都市に暗渠の川があるのはまぎれもない事実だが、見えぬ世界は迷宮そのもの。読者それぞれのラビリンスが創造されるというオモシロイ仕掛けになっている。確かに存在することは分かっていても、可視化することは不可能な川の水路は街を迷路にするのである。

海朧進化おぼろの深海魚

深海魚は、まだすべてが解明されているわけではない。「進化おぼろ」とは、曖昧で分からないことが多いと言うことだろう。とてつもない水圧に耐えている魚だったり、馬鹿でかい魚だったり、視力のない生命体だったり、深海をテーマとする研究者は面白くてたまらんだろう。海も魚も人間も、そして宇宙も、みんな「おぼろ」な存在である。「おぼろ」や「不可解」は詩の母である。

穴出づる蟻に無休の覚悟あり

週休二日のうえに、五連休とか九連休とか言っている日本。かつて連続して休めるのは、年に二回、盆、正月ぐらいしかなかった時代もあった。しかし、自然界の動物の世界では、太古からの働き方が不変である。句の蟻は、作者自身のことでもある。

一閃に電気の匂ひ春の雷

自然の一閃に、人工的な電気を感じた。常識では電気には臭いは無い。とこ

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

ろが「詩」では臭いが存在する。どちらが正しいか。詩を語るなら電気に匂いがあるとするのが正解だろう。詩には科学や思考は不要である。感性だけでいいのだ。

草の端の雫を燃やす蛍の火

美しい情景を写生している。暗闇では草の端の雫は見えず全く気付いていなかった。ところが、蛍が光った瞬間、蛍の光が光源となって雫を輝かせた。理屈では水は燃えないが、作者には雫が燃えていると感じたのである。ほんの短い一瞬の雫の炎を感性のシャッターが切り取った。

風邪籠り捨つる時間と得る時間

物事にはプラスとマイナスの二面がある。風邪をひいて苦しんでいる間は非生産な時間であり、時間を無駄にしてしまったと思ってしまう。しかし、少し治りかけた時「健康の有難さ」に改めて気付いたり、ふと面白いアイデアが浮かんだりすることがある。周りの家族や友人がいつになく優しいのにもお得感がある。

第三章「三尺寝」（二〇二〇）

強面の寝顔崩るる三尺寝

強面は誰なのか。おそらく作者と近しい存在なのだろう。普段は不愛想で苦虫を噛み潰したような顔の男だが、寝ている時は何と柔和な表情だろう。「三尺寝」を「餓鬼大将」に替えれば即、川柳となる。この句には強面の人の素直で素朴な一面を発見した驚きがある。本質を知った安心感とも言える。

中心は孤独な居場所女郎蜘蛛

蜘蛛の囲の中心に居て怖いものなしの筈の女郎蜘蛛だが、実は孤独な存在であるという句である。家来もおらず、あらゆる天敵に身構えていなければならない。これは、俳句結社の主宰にも通じることかも知れぬ。集団を率いる存在だから常に責任を持たねばならない。作者が女郎蜘蛛の立場になり切れたから

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

詠めた一句である。

去年今年時間一縷に継ぎ目なし

　去年から今年に変わる時、その継ぎ目は瞬間だからあるようで無い。その境を拡大して見ても、継ぎ目は見つからぬ筈だ。時間は連続しているからである。指先で触れて、これが去年でここからが今年とわかるような安っぽいつくりではない。継ぎ目なしとは実に言い得て妙である。

雑談に本音の混じるかき氷

　俳句は、身辺のあれこれを書いて、読者にドラマを想像してもらえる楽しさがある。かき氷を食べる時は解放感の中にあるから気が緩む。雑談にぴったりである。そんな時に本音がうっかり零れ落ちる。「ところで君、今の部署の仕事はどうかね」「このまま定年まで変化のない日々は嫌なんですよねえ」。かき氷を食べようと誘われたらご用心を。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。